

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 豊島慶子姉

開 会 招 詞 歴代誌上16：34-36

* 賛 美 歌 7：1 (ソングシート)

1. 父の神よ 夜は去りて、新たなる朝となりぬ。我らは今 御前みまえに出いでて、
御名みなをあがむ。 アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神かみよ、わたしを憐あわれんでください。御慈おんいつくしみをもって。深い御隣ふか おんあわれみをもって、背そむきの罪つみをぬぐい去さつ
てください。わたしの咎とがをことごとく洗あい、罪つみから清きよめてください。わたしは咎とがのううちに産うみ落おとされ、
母ははがわたしを身みごもったときも、わたしは罪つみのううちにああったのです。わたしを洗あってください。雪ゆきよりも
白しろくなるように。神かみよ、わたしの内うちに清きよい心こころを創そうぞう造あたし、新たしく確たかな靈れいをささずけてください。救すくいの喜よろこび
を再ふたびわたしに味あじわわせ、自じ由ゆうの靈れいによよって支さささえてください。主しゅよ、わたしくちびるの唇ひらを開ひらいてください。この
口くちは、あなたさんびの賛うた美うたを歌うたいます。主しゅイエス・キリストの御名しゅい えす きりすと みなによよって。アーメン。 (詩編51)
罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

- あなたは、わたしのほかに、何者なにものをも神かみとしてはならない。
- あなたは自分じぶんのために刻きざんだ像ざうを造つくってはならない。それにひれ伏ふしてはならない。それ
に仕つかえてはならない。
- あなたは、あなたの神かみ、主しゅの名なを、みだりに唱となえてはならない。主しゅは、
み名なをみだりに唱となえる者ものを、罰ばつしないではおかない。
- 安息日あんそくにちをおぼえて、これを聖せいとせよ。
- あなたの父ちちと母ははを敬うやまえ。
- あなたは殺ころしてはならない。
- あなたは姦淫かんいんしてはならない。
- あなたは盗ぬすんではならない。
- あなたは隣人りんじんについて偽証ぎしやうしてはならない。
- あなたは隣人りんじんの家いえをむさぼぼってはならない。隣人りんじんの妻つま、またすべて隣人りんじん
のものをむさぼぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 72：1

1. ころを高くあげよ！。主のみ声こゑにしたがい、ただ主のみを見あげて、ころを高くあ
げよう。アーメン

公 同 の 祈 禱 7 キリストの二性一人格

三位一体さんみいつたいの第二だいに位格いかくである神かみの御子みこは、まことの永遠えいえんの神かみであり、み父ちちと同質どうしつ・同どう等とうでありなが
ら、時満ときみちて、人間にんげんの性せい質しつを、それに属ぞくするすべての固有こゆうの性せい質しつや共通きゆうつうの弱よわさと共ともにとられ、しか
も罪つみはなかつた。彼かれは、聖靈せいれいの力ちからにより、処女おとめマリアの胎たいに彼女かのじょの本質ほんしつをとって身みごもられた。
そこで、二つの十全ふた じゅうぜんで区別くべつされた性せい質しつ、すなわち、神性しんせいと人性じんせいとが、変換へんかん・合ごう成せい・混こん合ごうすること

なく、一つの人格の中に、分離できないように結合されている。この人格は、まことの神またまことの人であり、しかも一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者である。アーメン

(ウエストミンスター信仰告白8章2節によるカルケドン信条：451年)

献 金 (黒) 教会活動・(赤) ギデオン協会 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

(夏期特別プログラム)

聖書朗読 詩編110編1-7節(旧約 p.952)

コロサイ3章1-4節(新約 p.371)

説教・祈祷 「キリストの横に」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 62：1、3

1. 一度は死にし身も 主によりて今生きぬ、御栄えの輝きに 罪の雲消えにけり。

(おりかえし) 昼となく、夜となく、主の愛に守られて いつか主に結ばれつ、世にはなき交わりよ。

2. 昼となく、夜となく、主はともにましませば、癒されぬ病なく、幸ならぬ禍もなし。

(おりかえし) アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にましますわれの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 64

みめぐみあふるる 父、み子、みたまの ひとりのみ神に みさかえつきざれ。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇陽子長老 (司会・受付 次週：雨宮信長老)

本日 受付 1階：那珂信之・星野房子執事 2階：大日南信也執事 / ZOOMホスト・録音：森永翔馬

次週 受付 1階：森永美保・加藤良明執事 2階：若月学執事 / ZOOMホスト・録音：門脇光生

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

コロサイ3：1-4「キリストの横に」

キリスト者の生き方

今日の3章からコロサイ書も新しい内容になっていきます。来週、再来週になると思いますが、5節以下では、キリスト者としての望ましくない生き方と、あるべき生き方がそれぞれ示されることとなります。そのような私たちの生き方、日々をどう過ごしていくのか、ということを考えます時の、その考え方の土台となるのが、先週の2章の最後の所と、今回の3章の始めの部分です。これもまた、一組になっているように見えます。最もわかりやすいのは、2章20節と3章1節です。20節では「あなた方はキリストと共に死んだ」とあります。一方、今日の所では「キリストと共に復活させられた」とあります。この二つのこと、死んで復活した、ということをおなたたちはもう体験したでしょう、とパウロは言うのです。それもイエス様と一緒にいますでにそうになっている、というのです。それはこのコロサイ書だけではなく、例えばローマ書にはこんな言葉があります。「もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。」(6：5)。

死と復活

ではその場合に、「キリストの死の姿、復活の姿にあやかる」生き方とはどのようなものでしょうか。私たちは、肉体の命をもってこの地上に生きています。さらに言うのなら、これからもこの地上において、同じこの肉体において寿命いっぱいまで生きていきますし生きていきたいのです。その点で間違いなく今日も明日もその先も、私たちはこの肉体において生きるのです。しかし、そこですでに生き方としてキリストと共なる死が始まっているし、復活が始まっている、そのような新しいありかたを生きる事が始まっている、というのです。ではそのような死と復活を生きるとはなにかですが、例えばコロサイ2章20節で「まだ世に属しているかのように生きている」という言葉がありました。ここで問題になっているのは、キリスト者は世に対して死んでいる、という事実です。世に対して死んでいるのに、まだ世に属しているように生きるのはおかしい、とパウロは言うのです。では世に属した生き方とは何かと言いますと、先週の21節以下にありましたように、自分で自分を縛る生き方、地上の存在である自分自身や、周りの人たちのことに思いを集中させてしまう生き方です。自分を頼りにし、地上のもの、手で触れられるもの、見えるもの、数えられるものばかりを見つめている生き方です。その場合には、私たちを支えるのは、自分が何ができたか、人に何を言われたか、ということ以上ではなくなります。うまくいったときは、自分もまずまずじゃないか、と満足し、人にいやなことを言われたら、自分は大めかもしれないと落ち込む、そのような生き方です。しかし、あなたたちはそのような生き方に対してはもう死んでいる、いや死んでいい、というのです。むしろあなたたちのこれからの人生は復活のイエス様と一緒に生きていく生き方だ、とパウロは言いたいのです。

上にあるもの

その場合に私たちを導く言葉は1節にあります「上にあるものを求めなさい」です。それに続いて、「そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます」とありますから、私たちが上に求めていくのは、ただただ、やみくもに天的なものを求めることではありません。また、世の終わりにばかり目を向けることでもありません。むしろ、今ここで、この地上で、今日この時に、イエス様を求めていく、イエス様を訪ねていく、という意味です。さらにここでは「キリストが神の右の座に」とありますから、神様とイエス様との深い関係性が完成していることが前提になっています。今日は旧約聖書の詩編110編を読みました。その一節はこうでした。「わが主に賜った主の御言葉。「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう。」。これはもともとはダビデに示された言葉ですが、神様がイエス様に対して私の右の座に着くがよい、と呼びかけている箇所です。それがすでに実現しているのです。しかもただ天においてこのまじわりが実現したというだけではなく、このようなイエス様の天への着座において、三位一体の霊のまじわりが完成し、それがもうすでに私たちの身近になっていると言いたいのです。なぜでしょうか。

キリストのとりなし

ローマ書にはこんな言葉があります。「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。」イエス様はただ天で楽しいな—と天界生活を満喫されているのではなく、私たちのために、今ここにいる方お一人お一人をいつでも気にして、とりなしてくださっているのです。わたしたちは日ごろ様々なことを祈ります。神様に向かって何を祈るか、ということはまだ、大切なテーマですが、基本的なこととして、私たちは、自ら感じていることを素直に祈ってよいと私は理解しています。そして、そのようにして私たちが祈りますその時に、たとえそれがどれほどつたない祈りであったとしても、天で神様がその祈りを聞いてくださるだけではなく、その神様の横でイエス様がとりなしの祈りをしてくださっているのです。こうして、私たちの祈りは、ただの独り言ではなく、むしろ、聖霊なる神様とイエス様によって取り次がれて神様の前にささげられて行くのです。また、それだけではなく、イエス様は天において地上に目を注がれています。コリント書にはこんな言葉があります。「キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。」（コリントII5：25）。

キリストの支配

イエス様は実は地上の国々をも支配されているのです。けれども私たちは、世界的な事件、戦争や反乱、飢饉、といったことですか、あるいはもっと身近なことで、自治体の中で起きてくることや、隣近所の関係で起きてくることまで、ありとあらゆることについて、自分はただ巻き込まれているばかり、自分ではなかなか解決できないというように感じられることが多いのかもしれませんが。実際の所、国同士の支配力がぶつかり合う場面で、例えばロシアとウクライナの戦いにおいて、私たちは何もすることができないのではないかと、というような徒労感を感じてしまうことがあります。しかし、そこであきらめてしまう必要はない、とパウロは言うのです。なぜなら、このような戦争の行く末についてという大きなことから、近隣で困難を抱えている人がいる、という身近な問題に至るまで、神様は、イエス様は、その天におけるご支配の中であって、すべてを知ってくださっているだけでなく支配されているからです。そして、すべてをご支配してくださるイエス様と私たちはつながっているのです。わたしたちが祈る時、この世界を支配しておられる方に祈っている、というこの事実によってパウロは私たちに励ましているのです。ですから「上にあるものを求めなさい」という言葉には、神様とのまじわりに信頼しよう、そこにとどまり続けよう、という勧めです。神様とのまじわりを粘り強く続け、求め続けること、実はそこにこそあるべき信仰の姿があるのです。祈り求めることこそが私たちの道なのです。

心を開ける

このような基本的なあり方について、さらに確認しているのが2節の言葉です。「上にあるものに心を留め、地上のものに心を惹かれないようにしなさい」。すでに、私たちは、この言葉の意味を理解できるのです。何に心を惹かれるのかが問われるのです。そして、間違いなく正しいのは、イエス様に思いを集めていくことです。それは具体的には、イエス様に祈っていくこと、そしてこのようにして、礼拝においてみ言葉に聞いていくことです。ここに集中するのです。その場合に、私たちはことさらに霊的であろうとする必要はないのです。むしろ、無理に霊的になろうとするのは誤りです。かっこうを付ける必要はないのです。なぜなら私たちは、肉体をもって創造されているからです。私たちは、地上のあり方、生きているその現実のままに神様と向き合うのです。そこで、一つだけ大切なことは、心がどちらを向いているかだ、とパウロは言いたいのです。わたしたちが信仰生活と言っているもの、この礼拝をはじめ、祈ったり、聖書を読んだり、黙想の時をもったり、という一つ一つのことに、何にもまして大切なのは、この心の方向です。私たちの日々のあゆみ、その一瞬、一瞬がイエス様へと向かっているのならイエス様の愛と、イエス様のご支配の中を歩み始めることになるのです。

命は天に？

その時に新しいことが実現します。その新しさとは、わたしたちが聖書にある通り、死んでいること、そして復活していることを味わっていくというありかたです。くどいようですが、私たちは、地上において肉体をもって生きています。けれども、そのような私たちの地上の歩みが新しくなるのです。そこで注目したいのは、3節にあります「命」という言葉です。これはおそらく、肉体の命、そして、

霊的な命、復活の命を含みこんでいます。実際の所、この後の四節では、終末的な再臨のことが語られています。キリストが現れるとは、イエス様がもう一度来て下さることですし、その時に私たちもまた、イエス様と共に新しい体をもって現れるだろう、という意味です。今日はこのことについてはあまり詳しくお話ししませんが、私たちの将来、肉体の死の先になお新しい命が約束されているというこの事実は私たちの人生を導く希望の星のような役割を果たしています。私たちには確かな将来の見通しがあるのです。けれども、今日特に注目したいのは4節の「あなた方の命であるキリスト」という言葉です。3節でも「命」が語られ、4節ではそれはキリストなのだ、というように言い直されています。これはいったい何の意味でしょうか。

キリストという命

すでにお話ししましたように、私たちは、イエス様へと思いを集めて生きていくことが命じられていました。ではそのようにして生きていくときに何が起きるのでしょうか。それを示しておりますが、3節であることもすでにお話ししました。イエス様に思いを集めていきます時に、私たちは、イエス様と一緒に死んで、復活していることに目が開かれるのでした。そしてそのようにして私たちの目が開かれていきます時には、実は私たちの命が、天に、イエス様の所にあることに、イエス様と一緒にあることにも目が開かれていくのです。「あなた方の命はキリストと共に神の内に隠されています」というのはそのような意味です。私たちの命は、たとえわたしたちが地上にあって、様々な試練の中にあっても、今すでに、天の神様の内に現れ始めている、イエス様と一緒にされて、イエス様とつながって、神様の中で守られ、まだ隠されているかもしれないけれども、完全には見えないかもしれないけれども、現れ始めている、地上の命を超えて復活に至る命が現れ始めている、言い換えるなら、この肉の命の先に復活の命がつながり始めている、このように言うのです。

キリストの横に

このようにして、私たちは、イエス様に思いを集めて生きていく時に、すでにイエス様とつながって、神様の右の座におられるイエス様と一緒に天につながられているのです。地上にいるけれども、天につながっている、地上にいるけれども、イエス様と一緒に天の神様の横にいる、わたしたちがみ言葉に聞き命続けていく時にすでに天に生きる、神様の横に、イエス様の横にいる生活が始まっているのです。

祈り

主イエス・キリストの父なる神様。聖名を賛美します。あなたは私たちをそれぞれにふさわしい時にご自身のもとに招きあなたの民としてくださいました故に感謝します。私たちは、キリストと共に死に、またキリスト共に復活するのぞみに生き始めております。なお地上にあって困難が多くありますけれども、このすべてをあなたが私たちの祈りにおいて知ってくださっていることを確信します。どうぞこれからも私たちがあなたの与えてくださった道を外れることなく、いよいよあなたに思いを集めていきますように。この週の歩みも、あなたの導きが豊かにありますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。